

くまもと復興応援ナースへのヒアリング結果について

調査目的：阿蘇地域の看護職員等の置かれている現状（県外との違い）を確認し、今後の看護職等の確保・育成のために、地域で必要な取組を検討する。

調査対象：くまもと復興応援ナース 7人

調査期間：平成29年10月19日～10月27日

1 くまもと復興応援ナースとして応募した動機について

- 災害看護の経験や興味があった。
- ちょうど次の仕事を探している時期で、被災地の現状を見たり、新しい経験をしたかったと思った。
- 地震被害により非常に困っていて、『急募』と出ていたため、自身の経験・技術が役に立つなら、是非お役に立ちたいと思った。

2 阿蘇（熊本）の生活環境等の印象について

- 水や空気が美味しく、自然・アウトドアが好きな人にはとても魅力的だと思う。
- 九州の真中に位置しており、休日には九州内を旅行（温泉・ドライブ・ツーリング等）できることも魅力。
- 地震被害等があり、もう少し暗い（悲壮感漂う）感じを想像していたが、意外に明るく生活していた。
- 昼食時など、同じ病棟のスタッフが作ってきた惣菜や野菜・果物などを分けてくれ、アットホームな職場環境だと感じた。

3 阿蘇地域の看護職員の勤務条件・勤務環境等について

- 最低賃金が低いためやむを得ないが、給与額を比べると格差があるのは事実。家賃・生活費等を抑えられる可能性もあるため、それらを含めて比べてみる必要があるだろう。
- 残業が多く、過酷な勤務だが、患者のため・地域のためという使命感等で乗り切っているなという印象。
- 時差出勤など、シフトのやり繰りをうまく組み合わせると、無理のない勤務ができると思う。実際に、以前勤めていた病院では改善できた。
- 過酷な勤務条件により職員が疲弊していて、医療事故の心配があるし、患者さんへ配慮に欠けるような対応をしている場面に遭遇したこともある。
- 患者の情報が、長年勤めている看護師の経験・記憶の中にあり、カルテを読んだだけでは患者の情報が分からない。

4 阿蘇地域の看護職員のスキルアップのモチベーション・環境について

- 距離的なハンデは大きく、セミナー、勉強会、学会の機会が少ないため、自然とスキルアップの意欲が低くなっていると思う。
- 看護研究をしたいと思っても、研究論文の指導をしてくれる人がいないし、専門書・文献等の収集も難しいようだ。県看護協会事務局にも、資料がそろっていないかった。（熊本市内の本屋で立ち読みをしていると聞いた。）
- パソコン等の電子化への対応が遅れていると感じる。外部からの刺激や新しいことに取り組むことに拒否反応を示す職員もいる。
- 今回、阿蘇地域で勤務してみて、新たな発見もあった。籍を残したまま、別の病院で働けるような仕組みができると、スキルアップに役立つと思う。

5 看護職員として働くときに、重要視する条件について

- ライフワークバランスを大切にしたい。メリハリをつけて仕事をしたい。
- 高齢の両親のことが心配なので、実家から通えるところで仕事をしたい。
- 病院スタッフが生き生きと働いているところを選びたい。働く前に、一度は病院の様子を確認してから決めたい。

6 都会から阿蘇地域に看護職員等呼び込むためのキャッチフレーズ等について

- 勤務して3年～5年で厳しい勤務で燃え尽き、失業保険をもらいながらリフレッシュしている人も多いため、自然の中で生活できる環境であることは、自然が好きな人にはアピールポイントになると思う。
- 勤務条件等の提示については、給与額に加えて、標準的な家賃額・生活費等を示して、阿蘇地域での生活が具体的にイメージできるような工夫が必要。
- 最初から定着を目指すのではなく、短期就業の看護師でも途絶えずに確保できる仕組みを考えていく方が良い。

7 くまもと復興応援ナース制度について

- 応援ナースとして登録しようという人は、ある程度、ボランティア精神がある人で、被災地や被災病院に迷惑は掛けたくない、足りない物を持って行っても良いとさえ思っているため、あまり気を使わずに、無いものは「無い」と最初から言ってほしい。
- 観光等の特典よりも、被災病院が困っていることを具体的に、前面に示してもらった方が、アピールになる。
- 「被災地でしか学べないこと」があると思う。仮設団地を回るなど、被災地の復興状況が分かるような機会を作ってほしい。